



Data

監督・脚本: エチエンヌ・コマル
 出演: レダ・カテブ/セシル・ドゥ・
 フランス/ベアタ・パーリャ
 /ビンバム・メルシュタイン

👁️👁️ みどころ

ジプシー音楽といえばフラメンコ。そう思っていたが、ナチスドイツに占領されたフランスのパリでは、ギタリストのジャンゴが楽団を率いて、ロマ音楽とスイングジャズを融合させた、何とも魅力的な演奏を！そこでは、思わず立ち上がってステップを踏み始める観客が次々と・・・。

平和な時代なら、小室哲哉の音楽を凌ぐ世界的大ヒットになったのだろうが、何せ時代は最悪！ナチス高官のファンがいても、それだけではとても、とても・・・。

彼の政治性やスイスへの逃亡劇には不満点も多いが、ラストではじめて聞く「レクイエム」の荘厳でもの哀しい響きには思わず涙が。『アマデウス』（84年）で聞いたモーツァルトの「レクイエム」と対比したが、さてあなたは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ ジャンゴの軽快なジプシースウィングに注目！ ■□■

ロマ（ジプシー）の音楽がなぜ美しいのか？それは私にはわからないが、本作冒頭に見るように、キャンプで火を囲みながらロマたちが弾くギターやバイオリンの音色は美しい。その直後に理不尽にも彼らはみんな殺されてしまうから、なおさらその音楽は哀愁を誘う。

それに対して、ナチス占領下のフランスのパリにある、もっとも華やかなミュージックホールでジプシー出身のギタリスト、ジャンゴ（レダ・カテブ）が数人の仲間と共に弾くジプシースウィングは、同じロマの音楽ながら軽快で楽しくリズムカル。そのため、誰でも自然にリズムをとり、踊り出しそうになってしまう。なるほど、これがロマ音楽とスイングジャズを融合させて「ヨーロッパ初の偉大なジャズミュージシャン」と称され、後々

の世界中のミュージシャンたちに大きな影響を与えた天才ギタリスト、ジャンゴの音楽なのだ。

■□■天才ギタリストの政治カンは何？■□■

本作の導入部を見ているとそのことはよくわかるが、「俺たちジブシーは戦争などしない。俺はミュージシャンで演奏するだけだ。」といくらタンカを切っても、ジャンゴのスタンスとは別に、ナチス占領下のパリではユダヤ人とローマ人への迫害は強化されていくことに。もっとも、ジャンゴの音楽はドイツの高官にも気に入られていたから、ジャンゴの愛人ルイーゼ（セシル・ドゥ・フランス）を通じてベルリンのコンサートで演奏すれば、ジャンゴの楽団員や家族たちの生命、安全は保証されるし、多額のギャラさえもらえるらしい。政治情勢に能天気なジャンゴと違って、時の情勢に敏感なルイーゼはジャンゴのために強引にベルリンでの演奏をすすめ、ルイーゼを嫌うジャンゴの妻ナギーヌ（ベアタ・パーリヤ）も同じ姿勢を示したが、さて当の本人は・・・？

「そんな演奏は真っ平ご免だ」と考えているジャンゴは、ある日、右手に包帯を巻き「ケガをしたから演奏はムリだ」と、とってつけたような説明をしたが、そんなことでナチスドイツの高官をごまかせるの？そして、危機を無事に乗り切れるの…？

■□■ナチス高官の前での演奏など真っ平！しかし・・・■□■

ナチスドイツによるユダヤ人やローマ人への弾圧も当初は緩やかだったから、早くから国外へ逃亡した人はホロコーストを逃れたらしい。しかし今、ジャンゴたちはルイーゼの協力を得て、スイスへ逃亡するためスイスと国境を接するトノン・レ・バントノン・レ・バンの町に移動していたが、なかなか手はず通りにコトが進まないらしい。

そのためジャンゴは妻ナギーヌや母親ネグロス（ビンバム・メルシュタイン）、楽団員らとともにあるジブシーのキャンプで世話になっていたが、そこでの食い扶持を稼ぐため即席バンドを結成し、素性を隠して演奏することに。おいおい、そんなことをして大丈夫なの？そんな状況がパリやベルリンにバレたら、ジャンゴたちの所在が明らかになり、厳罰が下されるのでは・・・？

■□■晩餐会でのイヤイヤながらの演奏は何？■□■

そんなジャンゴの元にやってきたのはルイーゼ。スイスへの逃亡の手引きが遅々として進まないことにイライラしていたジャンゴはルイーゼに対して不満をぶつけたが、それに対するルイーゼの返事は「あなたは、いつだって自分中心ネ！」というキツイもの。そりゃそうだ。ルイーゼは命を張ってナチス高官の間を渡り歩き、さまざまな策を弄して、ジャンゴたちの生き延びる道を探り続けていたのに、この言い方は・・・？

しかして、ここでもルイーゼの命を張った計画は、近々催されるナチス高官が集う晩餐

会で、ジャンゴたちが演奏している間に負傷したイギリス兵を含めたジプシーたちを脱出させるというもの。ナチス式の制約がいっぱいつけられた演奏に不満があるものの、ジャンゴはこの際、それに従うしかなし。しかし、その演奏は当初は単なるバックミュージックにすぎなかったが、少しずつテンポが速まり、出席者が自然にリズムをとってくると、あちこちで立ち上がりダンスの輪が……。これをリードし、ナチス兵の警戒の目を緩めるべく、積極的にダンスのステップを踏んだのはルイズだったが、会場が大盛り上がりになる中、遂に「音楽中止！」の命令が。その時は既に多くのジプシーたちの湖を渡る脱出行は成功していたが、さて、晩餐会に残ったジャンゴやルイズたちの運命は……？

■□■ アルプス越えのスイスへの脱出は？ ■□■

『サウンドオブミュージック』（65年）に見たトラップ大佐一家のアルプス越えは成功したが、1943年という時代に、ジプシーたちが国境の山を越えて、スイスに脱出することがそう簡単にできるはずはない。私はそう思っていたが、本作ラストのシーンではあっけなく（？）ジャンゴの国境越えが成功してしまうのでアレレ……。

まあ本作は音楽映画で、ユダヤ人三兄弟のナチスへの抵抗を描いた『ディファイアンス』（08年）（『シネマルーム22』109頁参照）のような難しい「戦争モノ」ではないから、ここをサラリとすませたのは仕方なし……？しかし、その次に、いきなり1945年のナチスドイツ敗北後のシーンが登場したことにはビックリ！思わず、これはちょっと手を抜きすぎでは……？

■□■ ジャンゴ作曲の「レクイエム」に涙 ■□■

そこで生き残ったジャンゴの指揮で演奏されるのが、ジャンゴ作曲の「レクイエム」だ。「レクイエム」といえば、何とんでもモーツァルト作曲の「レクイエム」が有名で、『アマデウス』（84年）ではその壮大な音楽がラストに登場し大いに感動を呼んだが、それは本作も同じだ。この曲は、スイスへの逃亡を計画している際に、偶然釣り場で知り合ったひとりの神父の勧めに従って、パイプオルガンを使ってジャンゴが作曲したものだが、現在その譜面はごく一部しか残っていないらしい。本作でそれが上演できたのは、音楽家・ウォーレン・エリスがその一部の楽譜にインスピレーションを得て、新たに作曲したためだが、さてその出来は……？

逃亡に向けたストーリーには荒さ（雑さ）が目立ったが、本作におけるジャンゴのギター演奏のすばらしさと、ジプシー音楽のエッセンスの表現は抜群。そして、ラストの「レクイエム」の演奏には思わず涙が……。

2017（平成29）年12月4日記